

おごせ 教育 Pick Up



越生小学校

10月19日にフレンドパークがありました。全校児童が縦割り班となり、趣向を凝らしたアトラクションで、ご家族や地域の方、子供同士で活動を楽しみました。どの教室も多くの人でにぎわいました。

梅園小学校

11月9日に校内音楽会を行いました。この日のためにどの学年も一生懸命に練習をし、がんばってきました。その成果を音楽会で発表することができ、会場の皆様からたくさんの拍手をいただきました。



おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加する子供たちを写真で紹介するコーナーです。

越生中学校

10月26日に、合唱コンクールが行われました。今年のスローガンは「和声～合唱で創るまだ見ぬ可能性～」です。自分たちの想いを歌声に乗せて多くの人に届けるため、生徒たちは練習を重ね、本番はどのクラスも素晴らしいハーモニーを響かせました。



令和元年度の国と県の学力調査結果について越生町の子供たちの状況をお知らせします。

1 全国学力・学習状況調査
 ○対象 小学6年・中学3年
 ○教科 国語、算数・数学、英語
 ※英語は中学3年が実施
 ※今年度からA問題（知識）とB問題（活用）を統合
 ○分かったこと
 〈小6〉
 ・国語の「話す・聞く能力」「読む能力」が身に付いている。
 ・国語の「書く能力」が十分に身に付いていない傾向がある。
 ・算数の「量と測定」の問題を解く力が身に付いている。
 〈中3〉
 ・各教科、全体的に問題を解く力が身に付いている。
 ・特に、国語の「話す・聞く能力」、数学の「資料の活用」の問題を解く力、英語の「外国語理解の能力」が身に付いている。

ズームイン教育268

学力向上への取り組み

越生町教育委員会

2 県学力・学習状況調査
 ○対象 小学4年・中学3年
 ※学力の伸びを見る調査
 ○教科 国語、算数・数学、英語
 ※英語は中学2、3年が実施
 ○分かったこと
 〈小学校〉
 ・全体的な学力の伸び幅の平均は、県内と同等であった。
 ・算数では、特に小6の伸び幅が大きく見られた。
 〈中学校〉
 ・全体的な学力の伸び幅の平均は、県内と同等であった。
 ・算数・数学では、中2の伸び幅が大きく見られた。
 3 これからの取組
 これらの傾向を踏まえ、教育委員会では、学校と連携して、次のように取り組んでいます。
 ○基礎的・基本的内容が確実に身に付く指導の徹底小テストや繰り返し学習などを行ったり、サマースクールなど補充学習の機会を設けたりして、全ての生徒たちの学力が伸びる指導を展開します。
 ○家庭学習の習慣化
 今年度、内容を見直し新たに作成した「越生町小中一貫教育」や「家庭生活・家庭学習のすすめ」のリーフレットを活用したり、子供たちが家庭で意欲的に取り組める課題を検討したり、家庭学習の習慣化を図る取組を充実させます。

越生浪漫

No. 131

越生人物往来⑨

佐佐木信綱・田山花袋・野口雨情

黒山鉦泉と梅林 越生町の二大観光地の一つ黒山三滝一帯には、古くから修験の霊場が開かれていました。幕末に津久根出身の尾張屋三平が江戸市中に紹介し、明治になって鉦泉が発見されると、観光地としても知られるようになりました。また、梅林（旧称新月ヶ瀬梅林）も、明治以降、関東の代表的な観梅地として発展していきます。鉄道や馬車などの交通の発達と、この地域の芸術文化志向の強い土地柄が相まって、文人墨客の杖を曳くところとなります。



佐佐木信綱 明治5年(1872)～昭和38年(1963) 国立国会図書館デジタルコレクションより

来しかひありき梅園のさと秩父嶺は霞に消えて水車 おとじづかなる梅の下かげ 梅園の千本の梢見下ろして 岩根にいこふ琴平の山

前川佐美雄「(裏) 明治三十四年 先生は東京から十六里の道を辿ってこの地に来遊され表記三首を詠まれた 時に二十九歳 明治大正昭和三代に渉る我国歌壇の泰斗文学博士佐佐木信綱先生惜しくも今は鬼籍に入せられたがその御遺作に寄せる追慕の念禁じ難く 御来訪八十周年を記念して歌碑建設を計画し御嫡子文綱氏御嫡孫幸綱氏の賛同を得て故博士の高弟 現朝日新聞歌壇選者前川佐美雄氏の揮毫を賜はり本懐達成を見るに到った その意義は寔に深く且篤く以て記して後世に伝へるものとする 昭和五十八年二月十一日 越生梅林保勝会―後略―」



田山花袋 明治4年(1871)～昭和5年(1930) wikipediaより

つな) 歌人・国文学者。三重県生れ。東大卒。父弘綱主宰の竹柏会を継ぎ、『心の花』を創刊。歌風は温和で平明。万葉集の研究でも知られる。歌集『思草』、著『日本歌学史』など。文化勲章

田山花袋 近代文学史に大きな足跡を記した田山花袋も幾度か来訪しています。旅行作家としても多くの作品を遺した花袋は、『山行水行』(大正6年(1917))、『秩父の山裾』(大正9年)、『東京近郊／一日の行楽』(大正12年)に大正期の越生を描いています。「黒山温泉の方へ行くには、津久根の梅を見て小杉から大満を通って、一里ほどで黒山の部落のあるところへと達した。それは次第に山のなかに入って行くようなところで、小さな谷川が涼々と路傍に音をたてていたり、前の山からひよつくり雲が湧き出していたりして、ちよつと



野口雨情 明治15年(1882)～昭和20年(1945) wikipediaより

世離れた感じがした。部落を通り越し、坂石町の方へ行く路とわかれて右に入ると、やがてそこに一軒の大きな鉦泉宿のあるのを見出した」(『東京近郊／一日の行楽』より)

【田山花袋(たやま・かたひ)】 小説家。群馬県生れ。一九〇七年(明治四〇)『蒲団』を発表して自然主義文学に一時期を画し、また赤裸々な現実描写を主張した。ほかに『生』『時は過ぎゆく』『一兵卒の銃殺』など

野口雨情 昭和8年(1933)、八高線開通を記念して『越生小唄』が創られました。北原白秋、西条八十とともに一世を風靡していた野口雨情の作詞です。当時の梅園村津久根に、雨情に師事し、同人誌『十六夜』を主宰していた新井幸作という文学青年がいました。おじの越生町長に乞われた幸作氏が、断られるのを覚悟で依頼したところ、快

諾を得られました。昭和8年1月、来町して越生館に投宿した雨情は、昼は着流し姿で街を徘徊し、夜は芸者を上げて酒を飲む毎日でした。幾日かが過ぎ、業を煮やして催促に出向いた町の幹部に、「粗末なものです」と、懐から『越生小唄』『山吹の里』2編を差し出したといひます。詩人の心に触れた何かが、この地を去り難くさせていたのかも知れません。3月16日、雨情、作曲の藤井清水、振付の島田豊が臨席し、越生町本町の労働会館で盛大な発表会が開催されました。山吹の里歴史公園に、『越生小唄』の冒頭「歌に床しいあの山吹の真筆を写した詩碑が立っています。9番の歌詞は「夏の三滝どんどど落ちて 肌を涼しい霧となる」、最後の10番が「梅に名高い新月ヶ瀬よ 小雪降るのに花が咲く」です。

【野口雨情(のぐち・うじょう)】 詩人。茨城県生れ。早大中退。民謡・童謡作家として有名。作『波浮の港』『十五夜お月さん』『七つの子』『赤い靴』『証城寺の狸囃子』など

※【 】内は『広辞苑 第七版』の記述を一部改変